

Nada Classical Music Club

灘校文化祭2022 クラシックコンサート @音楽室



ごあいさつ

本日は灘校クラシック研究部文化祭コンサートにお越しいただきありがとうございます。新型コロナウイルスの感染拡大が依然心配される中、今年も無事に文化祭コンサートを開催できたことを嬉しく思います。

今回は、毎年恒例のぐるぐる連弾に加え、6手連弾、ヴァイオリン三重奏も用意しております。何度かの学年閉鎖により練習時間がかなり削られてしまいましたが、部員一同ベストを尽くし、心を込めて演奏いたしますので、どうぞごゆっくりお楽しみください。

最後になりましたが顧問の片平先生、井上先生、八田先生、そしてこのコンサートでお世話になりました関係者の皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。

クラシック研究部部长 76 回生 毛利天翔

☆ クラシック研究部とは？

クラシック研究部はピアノ、弦楽器、リコーダー、和楽器など、楽器を演奏できる部員が集まり、毎年3回のコンサートを開いています。文化祭でのコンサート、本校大講堂で秋のコンサート、また年末には外部のホールで冬のコンサートがあります。各コンサートの1、2か月前から共演する仲間との合わせ練習を始め、コンサートはほぼ部員の力だけで運営します。

灘校クラシック研究部 秋のコンサートのお知らせ♪

クラシック研究部は今年も秋のコンサートを予定しておりますが、今後の状況によって変更になる場合がございます。曲目等の詳細情報は公式ホームページやFacebookにて更新を予定しておりますので是非ご覧ください。

日時：未定

料金：入場無料

場所：灘中学校・高等学校 大講堂

～Program～

※ 各部の開始時間はあくまで予定です

第 1 部 【9 : 20～】

1. J.ブラームス：ハンガリー舞曲 第 1 番 WoO.1
1st Pf. 山埜 保賢(H3) 2nd Pf. 田中 庸介(H3)
2. A.ハチャトゥリアン：剣の舞
1st Pf. 肥田 孟(H2) 2nd Pf. 田中 悠太(M3)
3. K.バデルト(神内敏之 編曲)：パイレーツ・オブ・カリビアン「彼こそが海賊」
1st Pf. 安田 勇太(H2) 2nd Pf. 安田 壮佑(H2)
4. G.ビゼー(A.サルトーリオ 編曲)：カルメン序曲
1st Pf. 藤田 啓吾(H3) 2nd Pf. 宮脇 淳(H2) 3rd Pf. 植村 晃太郎(M2)

♪ 新入生による演奏

5. V.モンティ：チャルダッシュ
Pf. 大和 平八(M2)
6. S.ラフマニノフ：プレリュード Op.23-5
Pf. 下村 宥喜(M3)
7. F.ショパン：エチュード Op.10-4
Pf. 廣田 直聡(M3)
8. F.クライスラー：スラヴ幻想曲
Vn. 毛利 天翔(H2) Pf. 宮村 隆仁(M3)
9. J.ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 第 3 楽章 Op.77
Vn. 千原 顕勝(H2) Pf. 肥田 孟(H2)

第 2 部 【10:35～】

10. 春畑セロリ：リレーdeバレエ（ぐるぐる連弾）
Pf. 足田 大成(M3)・原田 悠希(M3)・廣田 直聡(M3)・
肥田 孟(H2)・安田 勇太(H2)・山埜 保賢(H3)

11. W.A.モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク ト長調 第1楽章 K.525
1st Pf. 下村 有喜(M3) 2nd Pf. 肥田 孟(H2)
12. I.プレイエル：6つの小二重奏曲 第1曲 Op.48
1st Vn. 平見 優翔(H2) 2nd Vn. 千原 顕勝(H2)
13. R.コルサコフ：熊蜂の飛行
Pf. 井関 健侑(M3)

<ドビュッシー特集>

14. C.ドビュッシー：月の光
Pf. 植村 晃太郎(M2)
15. C.ドビュッシー：ピアノのために 第1曲 プレリユード
Pf. 足田 大成(M3)
16. C.ドビュッシー：ピアノのために 第3曲 トッカータ
Pf. 原田 悠希(M3)
17. C.ドビュッシー：「版画」より第3曲「雨の庭」
Pf. 田中 悠太(M3)
18. R.シューマン/F.リスト：献呈
Pf. 宮村 隆仁(M3)
19. M.ラヴェル：ツイガース
Vn. 毛利 天翔(H2) Pf. 廣田 直聡(M3)
20. P.デュカス：交響詩「魔法使いの弟子」
1st Pf. 肥田 孟(H2) 2nd Pf. 安田 壮佑(H2)

第3部【13:20～】

<春を感じる3曲>

21. F.ヘルマン：3つのヴァイオリンのためのカプリッチョ 第1番 ニ短調 Op.2
1st Vn. 毛利 天翔(H2) 2nd Vn. 千原 顕勝(H2) 3rd Vn. 坂本 熙(M2)
22. A.ハチャトゥリアン(A.コンドラティフ 編曲)：仮面舞踏会
1st Pf. 山埜 保賢(H3) 2nd Pf. 宮脇 淳(H2)
23. W.A.モーツァルト：きらきら星変奏曲（ぐるぐる連弾）
Pf. 植村 晃太郎(M2)・井関 健侑(M3)・下村 有喜(M3)・田中 悠太(M3)・
宮村 隆仁(M3)・宮脇 淳(H2)・安田 壮佑(H2)・田中 庸介(H3)

24. F.ショパン：ポロネーズ 第6番 変イ長調「英雄」 Op.53
Pf. 安田 勇太(H2)
25. R.シューマン：ピアノソナタ 第2番 ト短調 第1楽章 Op.22
Pf. 安田 壮佑(H2)
26. G.フォーレ：ドリー 第6曲 スペインの踊り Op.56
1st Pf. 宮村 隆仁(M3) 2nd Pf. 廣田 直聡(M3)
27. A.ドヴォルザーク：スラヴ舞曲集 Op.46-1, Op.72-2
1st Pf. 田中 庸介(H3) 2nd Pf. 肥田 孟(H2)

第4部【14:35～】

28. J.ブラームス：ヴァイオリンソナタ 第1番 ト長調「雨の歌」 Op.78
Vn. 戸田 智仁(H2) Pf. 安田 勇太(H2)
29. J.S.バッハ：パルティータ 2番「シンフォニア」「サラバンド」「ロンド」 BWV826
Pf. 宮脇 淳(H2)
30. F.ショパン：バラード 第1番 ト短調 Op.23
Pf. 肥田 孟(H2)
31. E.グラナドス：演奏会用アレグロ
Pf. 藤田 啓吾(H3)
32. C.ドビュッシー：12の練習曲 第3番 4度のために
Pf. 濱口 慶一郎(H3)
33. S.ラフマニノフ：幻想的小品集 前奏曲 嬰ハ短調 Op.3-2
Pf. 山埜 保賢(H3)
34. F.ショパン：スケルツォ 第2番 変ロ短調 Op.31
Pf. 田中 庸介(H3)

楽器略称 Pf. (ピアノ) Vn. (ヴァイオリン)

～Program Note～

第 1 部

1. J.ブラームス：ハンガリー舞曲 第 1 番 WoO.1

ヨハネス・ブラームス(1833-1897)はハンブルクで生まれ、しばらくは演奏家としても作曲家としてもあまり有名な存在ではなかったが、1869 年作曲のこのハンガリー舞曲が大ヒットした。

その理由としては、当時ヨーロッパではハンガリーの民族舞曲の一つであるチャールダーシュが人気を博しており、ハンガリー舞曲はチャールダーシュの要素を取り入れていたことが考えられる。また、その 19 世紀半ばは家庭にピアノが普及し始めたころであり、一台のピアノで連弾できるこの曲はその点でも人々に受け入れられた。

その他、1889 年にはトーマス・エジソンの代理人の依頼でこのハンガリー舞曲第一番を蓄音機に録音しており、これが世界初の録音だとされている。(山埜)

2. A.ハチャトゥリアン：剣の舞

アラム・イリイチ・ハチャトゥリアン(1903-1978)は、セルゲイ・プロコフィエフ(1891-1953)、ドミートリイ・ショスタコーヴィチ(1906-1975)と共に 20 世紀ソ連を代表する作曲家である。

アンコールピース、オーケストラ入門曲、映像 BGM などとしても知られる「剣の舞」は、1942 年に作曲されたハチャトゥリアンのバレエ「ガイーン」の最終幕で用いられる楽曲である。この楽曲は、クルド人が彎刀を持って舞う戦いの踊りを表している。

ハチャトゥリアンが「ガイーン」を制作した当初、この曲は含まれていなかった。しかし、初演前日になって「クルド人が彎刀(サーベル)を持って戦いの踊りを踊る」場面が追加されることになり、ハチャトゥリアンは急遽その場面のための曲を作曲する必要に迫られた。彼は踊りにふさわしいリズムを机を指で叩きながら徹夜で考案した末に現在の曲で使用されているリズムを閃き、一挙に曲を作り上げたらしい。作曲に要した時間は、たったの 8 時間だった。

この曲は、東洋諸民族の音楽語法を積極的に採用しており、その中でもハチャトゥリアンの祖国アルメニア、グルジア、レズギの民族の影響を受けている。伝統的な西洋のオーケストレーションを採用することで、野性的かつ精力的で、強烈なインパクトを持つ楽曲になった。繰り返しになるが、たった 8 時間で作った曲である。8 時間でここまで細部にまでこだわりぬかれた楽曲が作れるのかと、感動するばかりだ。

余談だが、西ロシアの国アルメニアで発行されている 50 ドラム紙幣にはハチャトゥリアンの肖像が使用されているらしい。まら、「剣の舞」の一連の誕生秘話は、2020 年に映画「剣の舞 我が心の旋律」でも描かれた。(肥田)

3. K.バデルト(神内敏之 編曲):パイレーツ・オブ・カリビアン「彼こそが海賊」

この曲はかの有名なパイレーツオブカリビ안의テーマ曲である。なので聞いたことのある方がほとんどだと思われるので、楽しんで聴いていただけるようにこの曲を選んだ。驚くべきことにパイレーツオブカリビ안의曲は 8 人の有名な音楽家によって作られている。アドバイザーとして指名されたハンス・ジマーがデモテーマを作曲、それをジマーが主催するプロダクションのメンバーからメインコンポーザーのクラウス・バデルト、『パシフィック・リム』のラミン・ジャワディ、『トランスフォーマー』シリーズのステイーヴ・ジャブロンスキー、「最後の海賊」で単独登板を果たしたジェフ・ザネリら、ジマーを含め 8 人体制という異例の布陣で作曲にあたった。このような豪華なメンバーによって作られたこの曲は、ヒロイックなモチーフや勇壮なメロディ、冒険心を煽るリズムと、どこをとっても完璧な楽曲であり、一度聴いたら忘れられない曲となっている。

楽しんで弾くので、それが伝わればと思う。(安田 勇太)

4. G.ビゼー(A.サルトーリオ 編曲):カルメン序曲

「カルメン」は、フランスの作曲家ジョルジュ・ビゼー(1838-1875)が作曲したオペラである。今回演奏するのはその中でも最もとも言っても言いすぎることはないぐらい有名な、前奏曲である。運動会など、さまざまなところで使われているので、聞き覚えがあるはずだ。

オペラのあらすじを書こう。主人公はジプシーの女カルメン。衛兵の伍長ホセが彼女に恋をし、2 人は結ばれる。しかし、移り気のカルメンは酒場でカルメンに一目惚れした闘牛士エスカミーリョに惹かれていく。やがてホセとエスカミーリョは決闘を行うことになるが、邪魔が入り、決着は闘牛場でつけることになる。エスカミーリョが闘牛場に入ったあと、ホセがカルメンに復縁を迫る。しかしカルメンは、「カルメンはいつも自由だ」と言い放ち、最後にはホセからもらった指輪を投げつけ、嫉妬に狂ったホセに刺し殺されてしまう。ホセが後悔して「愛するカルメン!」と叫ぶ中でオペラは終わる。

今回演奏する序曲は、“闘牛士の入場の音楽”と“闘牛士の歌”で構成される。オペラの中では、前者は第 4 幕で、後者は第 2 幕で使用される。前者は、なんとカルメンがホセに刺され、死ぬシーンにも用いられている。後者はエスカミーリョが酒場で高らかに歌い上げる曲で、これもまた大変有名だ。

前者の“闘牛士の入場の音楽”が明るいイメージなのに、どうして悲しいシーンで流れるのか、不思議な気がして調べてみた。映画理論ではこういった技法は「対位法」と呼ばれており、稀に用いられる。最も有名なのは巨匠スタンリー・キューブリックの「時計じかけのオレンジ」である。また、NHK ウィンタースポーツテーマソング「Fly High」で一躍有名になったシンガーソングライターのmilet(ミレイ)をご存知だろうか、彼女が、2019年4月のJ-WAVEの放送で対位法について話している。映画『キリング・フィールド』の中で、カンボジアの若い子が内戦に巻き込まれて殺される悲惨なシーンがあり、そこに明るい曲 Paul McCartney & Wings の『Band on the Run』が使われていることを取り上げて、「この曲の使われ方がすごい」と紹介した。「映像的にはすごく残酷だったりグロテスクなものを映しながら、曲は全然そんなことを感じさせない。ちょっと楽天的だったり、明るい音楽を、対照的な映像と合わせることで、その映像を引き立たせる」と対位法の効果を説明している。

この曲の裏には、刺されたカルメンの血と、徒競走でこけた血が流れているということに想いを馳せながら聴いて欲しい。(宮脇)

5. V.モンティ：チャルダッシュ

イタリア、ナポリ生まれの作曲家、ヴィットーリオ・モンティ(1868-1922)はドビュッシーやR.シュトラウスなどと同時代の作曲家である。

彼が作曲した「チャルダッシュ」元々は自身のマンドリン楽団のために作った曲と言われているが、現在では様々な楽器用にアレンジされており、ヴァイオリン独奏曲としてピアノや管弦楽の伴奏で演奏するのが最もポピュラーであろう。

タイトルの「チャルダッシュ」とは“酒場”(ハンガリー語で「チャールダ」)を意味するハンガリーの代表的な民族舞曲のことである。兵士が酒場で兵士募集のために踊り、それが農民たちの改作を経て徐々に広まり、19世紀にはヨーロッパ中に大流行した。あまりの人気に、ウィーン宮廷は一時チャルダッシュ禁止条例が出たと言う話は有名である。

この曲は、多くのハンガリーのジプシー風民族舞曲のように、ゆったりとした「ラッサン」と急速な「フリスカ」という2つの部分から構成されている。

哀愁を帯びた短調のラッサンから、一転して軽快なフリスカへ移行するところをカッコよく演奏したいと思う。(大和)

6. S.ラフマニノフ：プレリュード Op.23-5

セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)は、ロシアのピアニスト、作曲家、指揮者。苦学してモスクワ音楽院のピアノ科と作曲科を通常より1年早く卒業した。ピアノ演奏、指揮、作曲のいずれにおいても成功を取めたが、すべてに同時に打ち込むことに

は困難を感じていたのか、傑作は初期に多い。自身のピアノ曲では技巧に終始するのではなく、哀愁や情熱を宿した美しい旋律を楽曲へと堅実に組み立てる方法を知っていて、チャイコフスキー(1840-1893)を規範とし、あくまで長短調の枠にとどまって後期ロマン派の色彩と叙情性を継承している。

さて、ラフマニノフのプレリュードの中でも良く知られたこの曲は、冒頭からいさましく、しかし自由に奏される行進曲風のリズムが印象的に始まる。中間部は、レガートで情緒溢れるロマンチックな旋律で、ラフマニノフならではの美しさをもっている。(下村)

7. F.ショパン：エチュード Op.10-4

フレデリック・フランソワ・ショパン(1810-1849)は生涯で 27 曲の練習曲を作曲したが、この中で最初に発表したのが『12 の練習曲』Op.10 である。ショパンの練習曲は演奏技術の訓練のためだけの練習曲ではなく、美しい旋律を表現する技術の上達も目指したものだった。そのこともあって、これらは高い演奏技術と表現力が求められる。この作品はかの有名な音楽家フランツ・リストにささげられたが、ピアノの達人といわれた彼でさえも初見でこれらを演奏することはできなかったという。

今回演奏する 4 曲目は嬰ハ短調、プレストの 3 部形式で構成される。旋律の作り方はバッハの時代の「紡ぎだし」と呼ばれる細かな旋律を変奏や転回によって発展させていくものに倣ったものだ。また両手の指の速さと細かな動きが求められる難曲であり、指づかいも非常に奇異なものが求められる。(廣田)

8. F.クライスラー：スラヴ幻想曲

スラヴ幻想曲は、チェコの作曲家、アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)が作曲した 2 曲の原曲を、ヴァイオリニストであるフリッツ・クライスラー(1875-1962)がアレンジしたものである。

前半部はドヴォルザークの「ジプシー歌曲集」より「我が母の教えたまいし歌(Songs My Mother Taught Me)」が使われている。これはチェコ語の詩から生まれた有名な歌で、懐かしさを感じる美しいメロディーが特徴である。

後半部は「ロマンティックな小品」の第 1 曲(Allegro Moderato)が用いられている。これはドヴォルザークがヴァイオリンとピアノのために作曲した組曲だが、その中のどの曲もドヴォルザーク本人が書いた「弦楽三重奏のためのミニアチュール」の改作である。優雅な旋律の中に時折のぞかせる憂いの表情が美しさをより一層引き立てる。(毛利)

9. J.ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 第3楽章 Op.77

この曲は、ヨハネス・ブラームス(1833-1897)が、1878年に45歳の時に作曲した唯一のヴァイオリン協奏曲で、ベートーヴェン、メンデルスゾーン作品と並んで三大ヴァイオリン協奏曲と称されている。構成、主題などに彼が敬愛したベートーヴェンの影響が色濃く見られるものの、交響的な重厚な響き、入念な主題操作、独奏楽器を目立たせすぎないバランス感覚など、ブラームス自身の持ち味が存分に発揮されている。

さて、昨年末の冬のコンサートで第1楽章を演奏させていただいたが、この文化祭では、第3楽章をお聞きいただく。

第1楽章が、力強く終結した後、第2楽章では、平穏で牧歌的なブラームスらしい美しい音楽が奏される。そして、第3楽章は、ロ短調で独奏ヴァイオリンのエネルギッシュな3度の和音で始まる。重厚なブラームスらしさはそのまま、軽快なリズムによって、悲哀を含んだジブシー音楽が激しく奏される。曲全体に3度、オクターブとはずすとすぐばれる、分かりやすくて難しい和音が多用されているが、苦勞の割に難しそうには聞こえない。そこが、素晴らしい音楽ほど分かりやすいということの表れであろう。

オーケストラパートを一手に担うピアノとの掛け合い、独奏ヴァイオリンの和音に現れる2層のメロディーラインをお楽しみ頂けるように演奏できればと思う。(千原)

第2部

10. 春畑セロリ：リレーdeバレエ（ぐるぐる連弾）

毎度ご好評を頂く、もはや文化祭名物なぐるぐる連弾。去年に引き続き今年も2曲演奏します！

2017年文化祭での「ヴォルフガングの玉手箱」以来4年ぶりのぐるぐる連弾となった去年は、ベートーベンの「歓喜の歌」とドヴォルザークの「新世界より」という、超有名な2つの「第九」を演奏した。今年は、去年とはかなり曲調の違う、「きらきら星変奏曲」と「リレーdeバレエ」の2曲を演奏する。

「リレーdeバレエ」は、作曲家・音楽プロデューサー等として活躍されている春畑セロリさんが作曲された、その名の通りバレエの名曲をメドレー形式につないだ連弾曲である。以下の18曲を順につないでいく。皆さんは何曲ご存知ですか？

チャイコフスキー 〈情景〉～白鳥の湖より

チャイコフスキー 〈ワルツ〉～白鳥の湖より

チャイコフスキー 〈4羽の白鳥の踊り〉～白鳥の湖より

サン＝サーンス〈瀕死の白鳥〉～白鳥より
 ドリーブ〈ワルツ〉～コッペリアより
 ドリーブ〈マズルカ〉～コッペリアより
 チャイコフスキー〈ワルツ〉～眠れる森の美女より
 チャイコフスキー〈青い鳥とフロリナ王女〉～眠れる森の美女より
 アダン〈村娘のワルツ〉～ジゼルより
 アダン〈ジゼルのヴァリエーション〉～ジゼルより
 ブルクミュラー〈パ・ド・ドウのコーダ〉～ジゼルより
 ショパン〈前奏曲第7番〉～レ・シルフィードより
 チャイコフスキー〈小序曲〉～くるみ割り人形より
 チャイコフスキー〈金平糖の踊り〉～くるみ割り人形より
 ポンキエッリ〈時の踊り〉～ジョコンダより
 プロコフィエフ〈モンタギュー家とキャピュレット家〉～ロミオとジュリエット
 より
 ファリャ〈火祭りの踊り〉～恋は魔術師より
 ラヴェル〈ボレロ〉

バレエの名曲と一口に言っても、これまでのクラ研のコンサートで単体で演奏され
 た曲が複数含まれている。また、今冬開催された北京オリンピックのフィギュアスケ
 ート男子で銅メダルを獲得した宇野昌磨選手が、自身のフリーの演技に使用したラヴ
 エルの「ボレロ」が大トリに用いられるなど、バレエ音楽をあまり知らないといった
 方でもお楽しみいただける曲だと思う。男子校に何年も通っている人たちがこんなバ
 レエ曲を弾くというのはなんとも滑稽な話だが、リレーのバトンパスのようにパート
 が入れ替わっていく様子にも注目しながら、灘校生6人による名曲メドレーを是非お
 楽しみください。(肥田)

11. W.A.モーツァルト：アイネ・クライネ・ナハトムジーク ト長調 第1楽章 K.525

「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」は、ヴォルフガング・アマデウス・モーツ
 アルト(1756-1791)が1787年に作曲した彼の代表作である。題名の「アイネ・クライ
 ネ・ナハトムジーク」とは「小さな夜の曲」という意味のドイツ語で、この題名はモ
 ーツァルト自身が自作の目録に書き付けたものである。旧モーツァルト全集の楽譜で
 この曲に通し番号の13番が充てられたため「セレナード第13番」と表記されることが
 がある。かつて日本語では(直訳ふうに)「小夜曲」と訳されていたが今ではほとんど
 使われなくなっており、その一方で「小夜曲」は「セレナーデ」の訳語として使われ
 ている。

モーツァルトの自作の目録には第2楽章にメヌエットとトリオを含む5楽章として

記載されており、元来5楽章からなっていたと考えられる。しかしこの第2楽章が散逸してしまったために今では下のような4楽章形式で演奏されている。

第1楽章 アレグロ(ト長調、4分の4拍子、ソナタ形式)

第2楽章 ロマンツェ：アンダンテ(ハ長調、2分の2拍子、複合3部形式)

第3楽章 メヌエットとトリオ：アレグレット(ト長調(トリオはニ長調)、4分の3拍子、複合3部形式)

第4楽章 ロンド：アレグロ(ト長調、2分の2拍子、ロンド形式)

弦楽合奏、あるいは弦楽四重奏にコントラバスを加えた弦楽五重奏で演奏される事が多いが、今回はピアノ連弾版で演奏する。モーツァルトらしい明るく煌びやかな旋律をお楽しみいただきたい。(肥田)

12. I. プレイエル：6つの小二重奏曲 第1曲 Op.48

イニャス・ジョゼフ・プレイエル(仏)(イグナツ・ヨーゼフ・プライエル(独))作曲のこの曲は、今日ではヴァイオリンやフルートの教材とされているが、リサイタル等ではなかなか耳にすることができない。穏やかで美しい音の流れは、当時のサロン文化にはぴったりで、恐らく、聞いて楽しむうちにその場が盛り上がりとお遊び気分で演奏にもトライし、上手くいけば拍手喝采という体験型エンターテイメントでもあったろう。(僕たちが、仲間内でアンサンブルを楽しむのに似てはいるが、いかにも優雅できらびやかな場所、装い、振る舞いなのである。)

プレイエルは、オーストリア大公国に生まれ、後半生をフランスで過ごしたが、音楽活動のかたわら、音楽出版社を起業して、師ハイドンの作品をはじめ、ベートーヴェン等当時活躍した作曲家達の作品を多数出版するなど、企業家としても成功した。時代の空気を読み取ることに長けた彼は、ハイドンに信頼された良き弟子であり、ハイドンとベートーヴェンの狭間でもてはやされた人気作曲家であった。彼の音楽は、作曲当時にピッタリ過ぎたのかもしれないが、その生き方は、まさに今の時代に求められる起業家であり、有能な企業家であった。そして晩年、新しい音楽様式であるロマン派に自らの音楽様式がとってかわられると、潔く第一線を退く。

今日の演奏では、機を見るに敏であったプレイエルの生き方に思いを馳せながら、サロン文化の優雅さをお届けしたい。新型コロナや緊迫した世界情勢など何かとストレスフルな昨今、心 and ひとときをお過ごしいただければ幸いである。(千原)

13. R. コルサコフ：熊蜂の飛行

この作品の作者であるニコライ・アンドレイエヴィチ・リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)は管弦楽法の大家だった。

熊蜂の飛行はプーシキン原作による歌劇「皇帝サルタンの物語」の中で演奏される曲である。この曲はクマバチが羽を羽ばたかせながらブンブンと飛び回る様子を、速いテンポ半音階で動き回る旋律によって、巧みに表している。くるくると右へ左へと回るクマバチの羽の音や、それを奏でる細かな指遣いに是非とも注目して頂きたい。(井関)

14. C.ドビュッシー：月の光

この曲はフランスの作曲家、クロード・アシル・ドビュッシー(1862-1918)が 1890 年頃に作曲した「ベルガマスク組曲」の 3 曲目で、この 4 曲の中では最も有名な物となっている。

そもそも、ベルガマスク組曲の「ベルガマスク」とは、彼が気に入っていた詩人ヴェルレーヌの「ベルガモの踊り子」という言葉に着想を得て作られたという説が有力である。それらの詩には「月の光」という言葉も出てきており、彼が曲においてその世界観をモチーフに作曲したことは間違いないようである。

そして、彼は恋をしていた女性にこの曲を捧げた。きっと恋する切なさや甘い気持ちなど、揺れる心を曲に込めたのだろう。実際、月の光はもともと、「感傷的な散歩道」というタイトルで発表されたようだ。この曲には様々な説が流れているが、美しくもどこか切ないこの曲の旋律に耳を傾け、リラックスしながら聞いていただければ幸いである。(植村)

15. C.ドビュッシー：ピアノのために 第1曲 プレリユード

クロード・アシル・ドビュッシー(1862-1918)は、フランスの作曲家である。ドビュッシーは印象主義と呼ばれるフランス独特の音楽の創始者として、ピアノ音楽の新しい美の世界をくりひろげた。パリ音楽院に 10 歳で入学し、その後、多数の有名な曲を作曲する。

「ピアノのために」もドビュッシーの作品である。1890 年、ベルガマスク組曲(月の光等)にとりかかった後、その翌年マズルカを一曲書き、その後、若干の隔たりをおいて 1901 年に完成した、プレリユード・サラバンド・トッカータからなるドビュッシーのピアノ曲集である。まだ初期の彼の音楽的情緒を随所に残しながらも、その後本格的に開花していくドビュッシー独自の語法が見えかくれしており、ちょうど中間の分かれ道のポイントのような役割をしている曲である。

その中のプレリユードは日本語で前奏曲という意味であるため、「前奏曲」と書かれているものもある。4 分の 3 拍子で、主にメロディは左手にある。十分に生き生きと、リズムに弾くよう指示がある。フランス独特の流麗な音と明るい楽しさを表し、バッハのオルガン曲のスタイルと技法が反映されている。全体的に非常に激しい部分

と、ピアノでレガートに歌う部分の2つの非常に違う性格の部分によって構成されているので、その違いにも注目しながら聴いてほしい。(足田)

16. C.ドビュッシー：ピアノのために 第3曲 トッカータ

クロード・アシル・ドビュッシー(1862-1918)はパリの国立コンセルバトワールにピアノ科の生徒として入学した。彼は名曲の数々を生み出してきたが彼のピアノ曲は他のジャンルの曲に比べやや遅くに発達している。また、彼は独創的な音色、リズムで作曲しており、多大な影響を与えた作曲家である。彼の作曲活動は成長、変貌しており、初期、中期、後期の3つに分けられる。「ピアノのために」は初期の作品からしばらくして作曲された曲で、初期の作品に比べて作曲の技術が格段に成長しており、すでに十分に発達した独自性がみられる。また、この作曲ののち、ドビュッシーは円熟したピアノ曲を生み出している。

この曲集が作曲されたのは1896年だと考えられており、また、出版されたのは1901年である。3曲で構成されており、それぞれ古典的な題名がつけられているが、彼の独特な語法が用いられており、随所に彼の初期の音楽的情緒がみられる。今回はその第3曲「トッカータ」を演奏させていただく。(いきいきと、嬰ハ短調、4分の2拍子、複合3部型式)

トッカータという題名の通りこの曲では絶えず16分音符が刻まれるが、ただの単調な4連符とならないようにしなければならない。よくドビュッシーは印象主義といわれ、しばしば抽象的なイメージを持たれるが、この曲は秩序正しい曲のように思われる。この曲の中ではたくさんの音型が登場し、非常に多様な響きで演奏される。また、最初に提示される主題はのちにも4回程登場する。それはA(第1-77小節)で2回、B(第78-197小節)で1回、A'(第198-266小節)で2回出てくる。A'では、それがホ短調を挟んで出てき、どちらもまるで鐘のように高らかに響き、Bで出てきた音型も用いられたのち、嬰ハ短調主和音がフォルテシッシモで壮麗に幕を閉じる。(原田)

17. C.ドビュッシー：「版画」より第3曲「雨の庭」

クロード・アシル・ドビュッシー(1862~1918)は、フランスに生まれた作曲家で、印象主義音楽の創始者である。伝統から外れた音階と和声の用い方をもって、音楽に全く新しい美の世界を繰り広げた。1900年頃のドビュッシーは、文人、画家たちとの交友が深まると同時に、遠いロシアの5人組や極東の音楽の影響を反映していった。「版画」は、そうしてドビュッシーが独自の世界を開拓していったころのピアノ曲集であり、印象主義音楽の書法を確立した音楽ともいえる。

「版画」は「塔」「グラナダの夕べ」「雨の庭」の3曲で構成されており、「塔」は

インドネシアのバリ島のガムラン音楽を模したもの、「グラナダの夕べ」はジプシーの音階とギターの響き、リズムからスペインの古都グラナダを彷彿とさせる音楽となっている。

そして、「雨の庭」は、ドビュッシーの故郷フランスを連想させる曲である。夏の暑さに乾ききったパリの木立の上に軽い夕立が降り注ぐ、といった情景が描写されている。この曲には「眠れ眠れ、坊やよ眠れ」「もう森へは行かない」という 2 つのフランス童謡からとられた主題が登場する。この 2 つは当時のフランス人なら誰しもが知り、そして聞けば懐かしさを覚えるものだろう。

「雨の庭」はホ短調で始まるが、嬰へ長調、同短調、ハ短調、変ニ長調と目まぐるしく調性が入れ替わっていく。とりとめがないようでいて、実は精緻でしかも即興的な性格を失うことのない進展である。主題の変容と音彩の微妙な変化の魅力により、この曲は初演の時に観衆からアンコールを求められたという話もある。(田中 悠太)

18. R.シューマン/F.リスト：献呈

この曲は、ロベルト・シューマン(1810-1856)の歌曲集「ミルテの花(Op.25)」の第 1 曲「献呈」をフランツ・リスト(1811-1886)がピアノ独奏用に編曲したものである。

歌曲集「ミルテの花」は 26 曲からなる。全体に一貫した思想や各曲間に音楽的な関連はないが、クララとの熱烈な恋愛中に、結婚を想いながら作られたものであるため、大部分は抒情的で恋愛に関係ある歌となっている。そして、1840 年 9 月、結婚式の前夜にクララに捧げられた。

この歌曲集は、シューマンがピアノ曲から突如として歌曲の創作に転じた 2 つ目の歌曲集であり、初期の作品である。しかし、早くもシューマンの特徴がはっきりと認められる部分があり、のちのシューマンの歌曲の円熟を十分に予想させられる。

今回演奏する曲は、第 1 番「献呈」が原曲となっており、それをリストがピアノ独奏用に編曲したものである。彼は、前奏など数カ所を拡大し、転調後の第 2 部の前に休止を挟むことによって調整の隔たりや響きの際を際立たせた。また、fff で変容・反復された主旋律がコーダに収束する際の終止和音を弱拍から強拍へと移すなど、表現の面においても改変をしている。実は、クララはリストの編曲を「原曲の良さを台無しにしている！」と怒ったと言われているのだが、彼の表現が好みでなかったのだろう。捧げられた彼女本人がピアノ独奏用に編曲したものもあるそうだ。1 回聴いてみたが、リスト編曲のものとかかなり違っていたので、是非聴いてみてほしい。

ところで、原曲はリュッケルトによる無題の詩に作曲されているのだが、その「言葉」と「音楽」が対応している。歌詞について述べるのは解説が長くなるので割愛するが、歌詞を見ながら聴くと、例えば「痛み」など暗い言葉のところに短調の和音を

置いていることなど、言葉に応じて曲の雰囲気を変化しているのが分かると思う。これは、シューマンが意図して詩に込められている感情を音で表現しようとしたものであり、それを表現するのがこの曲を弾くうえで最も難しいのではないか。(宮村)

19. M.ラヴェル：ツィガース

モーリス・ラヴェル(1875-1937)は、バスク系フランス人の作曲家である。ドビュッシーとともに印象派の作曲家に分類されることが多いが、ラヴェルの作品はやや古典的で、民族音楽やジャズも積極的に取り入れている。また、「スイスの時計職人」と評されるほどの作曲の緻密さも特徴である。

ラヴェルは、ある時ハンガリー出身の女性ヴァイオリニスト、イエリー・ダラーニの演奏に感激し、彼女のためにハンガリー風の曲を書こうと思い立った。イエリーの演奏技術にも感銘を受けたラヴェルは、これを即興的で名人芸的な曲として進めた。そうして完成したのが「ツィガース」である。様々な趣向を凝らすうちに仕上がるのが遅くなってしまい、イエリーが楽譜を受け取ったのは初演の3日前だったらしい。

「ツィガース」は「チャルダッシュ」や「ツィゴイネルワイゼン」と同様に、ハンガリーのロマ(いわゆるジプシー)の伝統をたたえる作品、つまりロマ音楽である(実際「ツィガース」はフランス語で「ロマ」や「ジプシー」という意味)。技巧を詰め込みすぎた感はあるが、ロマが抱える苦難から陽気な生活まで味わえる作品となっている。(毛利)

20. P.デュカス：交響詩「魔法使いの弟子」

ポール・アブラアム・デュカス(1865-1935)は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したフランス出身の作曲家である。デュカスは孤独を愛し、作品は完璧を目指すために1年に1作ほどしか作られず、中にはオペラ「アリアーヌと青ひげ」のように10年を要したものもあった。自己批判の精神がとても厳しく、晩年には70数曲もの未完・未発表の作品を破棄してしまい、今日残るのはたった20曲足らずと言われている。

交響詩「魔法使いの弟子(L'apprenti sorcier)」は1897年に完成したデュカスの代表作であり、ドイツの劇作家ゲーテ(1749-1832)がサモサタのルキアノス(120?-180?)の詩「嘘を好む人たち」(Philopseudes)に基づき書き上げたバラード「魔法使いの弟子」(Der Zauberlehrling)の仏語訳を原典としている。

詩のあらすじは次のとおりである。

老いた魔法使いが若い見習いに雑用を言い残し、自分の工房を旅立つところから物語が始まる。見習いは命じられた水汲みの仕事に飽き飽きして、箒に魔法をか

けて自分の仕事の身代わりをさせるが、見習いはまだ完全には魔法の訓練を受けていなかった。そのためやがて床一面は水浸しとなってしまう、見習いは魔法を止める呪文が分からないので、自分に箒を止める力がないことを思い知らされる。絶望のあまりに、見習いは鉈で箒を粉々にするが、さらに箒の破片が新たな箒となり、水汲みを続けていき、かえって速く水で溢れ返ってしまう。もはや洪水のような勢いに手のつけようが無くなったかに見えた瞬間、師匠の魔法使いが戻ってきて、たちまちまじないをかけて急場を救い、弟子を叱り付けるのだった。

1940年にウォルト・ディズニーのアニメ映画「ファンタジア」に使用され、ミッキーマウスが「魔法使いの弟子」役を「演じた」ことにより、この曲はいつそう有名になった。僕は(一部だけだが)「ファンタジア」をネット上で見たが、半世紀以上昔の作品だとは思えないほどのディズニー映画のアニメーションクオリティの高さにも感動した。曲想にも注目しながら、ぜひアニメも一度ご覧いただきたい。(肥田)

第3部

21. F.ヘルマン：3つのヴァイオリンのためのカプリッチョ 第1番 ニ短調 Op.2

フリードリヒ・ヘルマン(1828-1907)は、フランクフルト生まれのヴァイオリニスト・作曲家である。メンデルスゾーンが設立したライプツィヒの音楽院で学び、その後教授に就任した。ヴァイオリンについての多くの作品、入門書の執筆をしたことで知られている。

今回演奏するのは、ヘルマンが作曲した「3つのヴァイオリンのためのカプリッチョ」、3曲ある中の第1番である。難しい曲ではあるが、3人一丸となって爽やかに演奏できればと思う。(毛利)

22. A.ハチャトゥリアン(A.コンドラティフ 編曲)：仮面舞踏会

この曲は、浅田真央さんの2008-2009年フリーと2009-2010年のショートの演技に使われ、彼女が銀メダルに輝いたバンクーバーオリンピックの折には日本中のテレビに何度も流れた。そのため日本人みんなに聞き覚えのある国民的な曲だ。

しかし、作曲者や曲の由来や背景については知らない人の方が多いような気がする。作曲者はアラム・ハチャトゥリアン(1903-1978)である。彼は、プロコフィエフ、ショスタコーヴィチと並ぶソビエト3大巨匠の一人である。また、旧ロシアのグルジア(現在のジョージア、ウクライナの南東、黒海に面した国)に生まれたアルメニア人である。嬉しいことに、1963年に60歳で来日し、東京、名古屋、大阪、京都でコ

ンサートを開催し、「日本は、私たちの愛している音楽のように美しい。」と称したという記録が残っている。

一方、この曲の元々は、ミハイル・レー尔蒙トフが書いた戯曲「仮面舞踏会」につけられた劇音楽であった。調べていくうちに、私が最も興味深く思ったのは、この戯曲のストーリーだ。

舞台は、19世紀ロシアの社交界。凄腕の賭博師アルベニンと妻ニーナが賭博に出かけ、夫アルベニンは、破産寸前の若い公爵を賭博で救ってやる。後日、また賭博に出かけた時、妻ニーナは腕輪を落とし、それをある男爵未亡人が拾う。この男爵未亡人は、公爵(アルベニンが救った)から口説かれていて、はぐらかすために拾った腕輪を渡して逃げる。公爵は、その腕輪を口説いた女からの贈物と言ってアルベニンにひけらかし自慢する。見覚えのある腕輪を不思議に思った夫アルベニン、やがて妻が腕輪を無くしたことを知り、公爵と妻が恋仲であると思い込んで激しく嫉妬する。

最後の仮面舞踏会の場面、夫は妻のアイスクリームに毒を盛り、妻はなんの疑いもなくそれを食べる。やがて妻はひどく苦しみもだえながら、夫の疑いの叱責に対して身の潔白を訴え続けて死んでいく。この強烈な場面に、この曲「ワルツ」が流れるのである。当時のハチャトゥリアンは、「この場面こそが一番の見せ場だ。」と言い、ことのほか「ワルツ」の作曲に心を注いだと伝えられる。

みんなが聞き覚えあるこのメロディーは、力強く壮大でありつつ、悲壮さに心を揺さぶる。それは「嫉妬」「毒殺」「疑惑」「復讐」「死」の曲だったのである。

戯曲「仮面舞踏会」につけられた14曲のうち、後に5曲(ワルツ、ノクターン、マズルカ、ロマンス、ギャロップ)が選ばれ、現在はオーケストラ用の組曲「仮面舞踏会」となってしばしば演奏されている。だが、今では戯曲「仮面舞踏会」が公演されることは極めて稀だそうだ。(宮脇)

23. W.A.モーツァルト：きらきら星変奏曲（ぐるぐる連弾）

世界中のみんなに親しまれている「♪ドド ソソ ララ ソー ファファ ミミ レレ ドー♪」は、誰の作曲で、どこからきたのだろうか。定かではないが、1740年ごろからフランスで原詞は存在して歌われていたらしい。その頃は、「ああ、ママ、お話したいの」という幼い子のママへの可愛いおしゃべり歌だった、という説もある。やがて、1761年に歌詞なしで、作曲者不明のまま、このメロディーがフランスで出版された。そして、そのメロディーに「Ah! Vous dirai-je, maman ああ、お母さん、あなたに申しませう」という、若い娘が初恋の甘い気持ちを母親に話す内容の歌詞がつけられ、当時のフランスでシャンソンとして大流行した。1770年の終わりにパリに来ていたモーツァルトは、この流行りの素朴なメロディーを気に入り、1781年頃にウィーンでこ

のメロディーをテーマにピアノの変奏曲を作曲した。

さて、モーツァルトの死後 1806 年、イギリスの詩人ジェーン・テイラーが「Twinkle, twinkle, little star」の歌詞を書き、テイラー姉妹によって童謡として広められた。またドイツでは、「サンタクロースがやってくる」という歌詞が、アメリカでは、「A B C D E F G……」という ABC の歌詞がつけられ、各国で親しみ歌われるようになった。日本では大正 3 年、イギリスの「Twinkle, twinkle……」を基に訳詞されたものが「英語唱歌教科書 巻一」に掲載され、国民的存在となった。気がついてみると、モーツァルトの 12 変奏曲も、「きらきら星変奏曲」と呼ばれていたのである。

また興味深いことに、当時フランスで大流行していたこのシャンソンのメロディーは、モーツァルトの変奏曲のみならず、ハイドンの交響曲、リスト、サン＝サーンスの曲にも取り入れられている。

つまり、最も重要なことは、だれが作曲したか定かでない民謡が、大衆の間で歌い育まれ、他国の大作曲家までも刺激し、世界で替え歌にされて今日も唱歌され続けているということである。音楽というものは、本当に素晴らしい！

本日は、モーツァルトの主題と 12 変奏曲のうち、主題、第 1、第 3、第 5、第 6、第 8、第 12 変奏をぐるぐる連弾で演奏する。(宮脇)

24. F.ショパン：ポロネーズ 第 6 番 変イ長調「英雄」Op.53

ピアノ曲のジャンルとしてのポロネーズには、長い伝統がある。元々宮廷舞踊となったポロネーズは、ポーランドの代表的な舞踊として国際的に認められたのみならず、ポーランドの民族精神を表現するもっとも象徴的な音楽となった。様々な変遷を経て、1700 年頃のポロネーズは、元の舞踊が持っていたリズムや楽式を受け継いで、ポーランド趣味、一種の異国情緒を感じさせる形式へと姿を整えていった。19 世紀初頭にショパンが継承したポロネーズとはこのように、郷土の伝統というよりは国際的に久しく通曉していた形式あるいはジャンルのひとつだった。ショパンは、この時代に地図上になかったポーランドへ、憂国の士としてポーランドらしさを彼の音楽に取り入れることで、祖国への想いを表現した。パリ・デビューより後に書かれたポロネーズとそれ以前のものとが大きく異なっているのは、そのためである。通称を「英雄ポロネーズ」とよばれる本作は、この作曲家の明るく健康的な面のみを凝集した壮麗な主題を持ち、ピアノ曲としてほぼ最高レベルの演奏技術を要求する点で、ショパンの最高傑作のひとつに数えられる。

全体は、前奏も含めてほぼ完全に、16 小節を 1 セクションとする。この 16 小節は 4×4 から成り、各部が起承転結に相当する。楽曲は前奏で始まるが、そこから 16 小節を 4 セクションをおき、この 4 つがさらに起承転結の機能を担う。再現部分(第 155 小節以降)では、冒頭部分の 2 番目のセクションが回帰し、8 小節のコーダに入る。コ

ーダもまた、2×4で起承転結を分担している。最後の3小節は、コードの「結」の部分の反復である。(ところで、冒頭部分の前奏16小節は自身が4×4の起承転結を内包する一方、前半4セクションから成る大きな起承転結に対しては、「起」の部分の拡大形とみることができる。)

この理路整然とした構造が少しずつ変形されるのが、中間部(第81-154小節)である。第81-84小節は、続く16小節に対する前奏であり、「起」の拡大として働く。その後3度の起承転結の後、第129小節以降は、もはや4小節単位の明解な起承転結を放棄し、右手の半音階進行の効果も利用して、音楽がどこへ向かうのかを曖昧にしたまま進んでいく。このように《英雄ポロネーズ》は、いくつものレベルで起承転結の構造をもっており、それ故にドラマ性と推進力に満ちている。単に有名なだけではないので楽しんで聞いていただければと思う。(安田 勇太)

26. G.フォーレ：ドリー 第6曲 スペインの踊り Op.56

G.フォーレ(1845-1924)は19世紀に活躍したフランスの作曲家で、今日でもオペラ『マスクとベルガマスク』や『レクイエム』などの作品が有名である。

今回演奏する『スペインの踊り』は、フォーレが妻を通じて親しくなった銀行家の娘であり不倫関係にあったといわれる女性エンマ・バルダックとその娘エレーヌに捧げられた。「ドリー」という作品名はエレーヌの愛称からきている。エンマはアマチュア歌手として活動しており、後に作曲家ドビュッシーの妻となる女性である。ドビュッシーは彼女との間の娘エマに『子供の領分』というピアノ組曲をささげておりこの2つの作品は並べて評価されることも多い。構成される6曲はいずれも1893年から1897年にかけて作曲され1898年にアルフレッド・コルトーとエドゥアール・リスラーの連弾によって初演された。

終曲『スペインの踊り』は前の五曲とは変わって天真爛漫な明るさに満ちた明るい曲調となっている。(廣田)

27. A.ドヴォルザーク：スラヴ舞曲集 Op.46-1, Op.72-2

『スラヴ舞曲集』(チェコ語: Slovanské tance)は、アントニン・ドヴォルザーク(1841-1904)が作曲した舞曲集である。元はピアノ連弾のために書かれたが、作曲者自身によって全曲が管弦楽編曲された。各8曲からなる第1集作品46(B83)と第2集作品72(B147)がある。

ドヴォルザークは1875年にオーストリア帝国政府の奨学金の審査で提出作品が認められ、以後その支給を受けて乏しい収入を補っていた。その審査員の中にはハンスリックやブラームスがいたが、特にブラームスはドヴォルザークの才能を高く評価し、ベルリンの出版社、ジムロックにドヴォルザークを紹介した。ジムロックは、大ヒット

トしたブラームスの「ハンガリー舞曲集」に続くものとして、ドヴォルザークにボヘミア(チェコ共和国西部)の民謡をもとにした連弾曲集の作曲を依頼した。ドヴォルザークはすぐにこの依頼にこたえ、1878年3月18日から5月7日の約2ヶ月の間に第1集全8曲を作曲し、同年8月には管弦楽曲化を完成させた。

第1集では、ボヘミアの代表的な舞曲であるフリアント、ソウセツカー、スコチナーなどが取り上げられている。民族舞曲のリズムや特徴を生かしつつも、旋律は彼独自に作曲している。今回演奏する第1曲には「フリアント」が取り入れられており、4分の2拍子と4分の3拍子が交互に入れ替わる熱狂的な舞曲となっている。楽譜上は一貫して4分の3拍子で書かれているが、強いアクセントによってヘミオラとして2拍子が強調される。楽曲は3部分からなり、中間部はイ長調(平行短調の同主長調)へ転調する。

第1集の世界的なヒットを受け、ジムロック社はドヴォルザークに次なる舞曲集の作曲を要求した。これを受けて彼が1886年6月からたった1ヶ月で作曲したのが、『スラヴ舞曲集』第2集 作品72である。ピアノ連弾版の全8曲がまず完成し、管弦楽編曲も同年11月から翌1887年1月にかけて行われ、両版ともそれぞれの完成の年に出版された。

第2集の特色は、チェコの舞曲は少数にとどめ、他のスラヴ地域の舞曲を取り入れている点である。今回演奏する第2番は、管弦楽版が時折TV番組やCMにも取り上げられるなど、特に有名だ。NHKの音楽番組「名曲アルバム」の初回放送(1976年4月5日)でもこの第2番が取り上げられた。(肥田)

第4部

28. J.ブラームス：ヴァイオリンソナタ 第1番 ト長調「雨の歌」Op.78

ヨハネス・ブラームス(1833-1897)はドイツの作曲家、ピアニスト、指揮者である。彼が生涯で書き起こしたヴァイオリンソナタは3つあり、第一番の「雨の歌」はヴァイオリンの名曲として、そしてブラームスの名曲として今日まで多くの人に親しまれている。

ところで、この曲になぜ「雨の歌」という題がついているのか、その話をする前に、ブラームスの人生を辿っていく中で欠かせない人物がいる。それがロベルト・シューマンとクララ・シューマン夫妻である。ブラームスが作曲への道を目指す途中、20歳の頃に友人からロベルト・シューマンに会うことを勧められたのが出会いであった。シューマンはブラームスの演奏と音楽に感銘を受け、ブラームスの作品を広めるために重要な役割を演じた。ブラームスもまたシューマンを強く尊敬していた。またこの

時、ブラームスは 14 歳年上のシューマンの妻クララと知り合い、生涯に渡って親しく交流を続けることになった。このころすでにシューマンは精神疾患に悩まされており、ブラームスはシューマン家の家政を手伝い一家を助けた。こうしたなかでブラームスとクララの距離は近づき、1855 年ごろのクララへの手紙の中では彼女のことを「君」と表現するなど恋愛に近い関係になったという。しかしながらブラームスはシューマンも強く尊敬しており、1856 年にシューマンが死去したのちも彼女と結婚することにはなかった。こうしてシューマン一家とは生涯にわたり親交を続けた。

先程の話に戻ろう。この曲自体は 1879 年、ブラームスが 46 歳のときに作曲されたが、話は 6 年前に遡る。ブラームスが 40 歳の時、クララの 54 歳の誕生日にプレゼントとして一曲の歌曲を贈った。それが、歌曲「雨の歌」である。雨の日に子供の頃を回想するような歌詞から題されたこの歌曲をクララは大変気に入った。そしてその 6 年後にこの曲がヴァイオリンソナタになる。なぜヴァイオリンソナタになったのか、この背景には悲しい物語が隠れている。

シューマン夫妻の末子にフェリックスという子供がいた。フェリックスという名はブラームスが名付けたものであり、ブラームス自身も我が子のように愛していたという。フェリックスは少し病弱であり、ある日病気になってしまう。彼の闘病中ブラームスはこのヴァイオリンソナタ第一番の第 2 楽章の最初のメロディを見舞いの手紙に添えて贈ったとされている。しかし、フェリックスは翌年亡くなってしまう。ブラームスは悲しみの中、このヴァイオリンソナタを完成させた。

この曲にはたくさんの想いや情景が散りばめられている。クララが気に入っていた旋律、そしてブラームスのフェリックスへの愛情、全てがこの曲に、「雨の歌」という言葉に込められている。その愛を可能な限り伝えられるよう演奏したい。(戸田)

29. J.S.バッハ：パルティータ 2 番「シンフォニア」「サラバンド」「ロンド」BWV826

パルティータとは、一つの主題(またはモチーフ、情緒)によって、統一性をもって構成された組曲を意味する。バッハのパルティータ(クラヴィーアのため)には、全 6 曲が納められている。その 6 曲すべてが個性的で美しい。円熟期で意気込みをもったバッハが、イタリア的音楽要素を取り入れて組曲に新しい風を吹き込んだ。

本日は、それら 6 曲の中から第 2 番を、さらに第 2 番は以下の短い 6 曲の組曲となっており、第 1, 4, 5 曲目を演奏する。

1. シンフォニア(イタリア風序曲、合奏的)
2. アルマンド (4 拍子で中スピードのドイツ風舞曲、組曲の 1~2 番目にくる)
3. クーラント (3 拍子の流れるような舞曲、アルマンドとサラバンドの間)
4. サラバンド (穏やかな 3 拍子の曲)

5. ロンド (同じ形式が繰り返される回旋曲)

6. カプリッチョ(テーマを追いかけて応唱するフーガ風で、自由な形式の奇想曲)

私は小学2年生のときから、プレインヴェンションからインヴェンションへ、そしてフランス組曲、シンフォニアへとバッハをずっと弾いてきた。中2でコンクールを離れると決めたとき、「バッハは、もうええやろ。」と思ったのに、中3で憧れの平均律を弾いて、気がついてみると、バッハは嫌いではなかった。そして、今パルティータを弾く。バロックの高峰にそびえると称される素晴らしすぎる曲だ。

私の演奏では不十分だと思うので、ぜひマルタ・アルゲリッチのパルティータ第2番をお聴きいただければとお薦めしたい。心が震える演奏だ。

ここでバッハの生涯について少し触れておきたい。

旧東ドイツのアイゼナッハという町で、父は楽師であり、音楽一家の末っ子として生まれた。音楽の教育に恵まれ、学問も広く学んで育つ。が、8歳のとき母を亡くし、翌年に父を亡くして孤児となり、生活は急変する。そこから始まる招待生や給士生の苦労の日々の中にあっても音楽を懸命に学んだ。やがて教会オルガニストとして、さらに宮廷楽長として、その優れた演奏は高く評価された。しかしながら、バッハの生活は苦しく、少しでもよい待遇のところへと赴いては、しばしばトラブルを起こし、契約違反で投獄されたりもした。

32歳のときに、ケーテンの宮廷楽長になり、ケーテンを統治するレオポルト侯と出会ったことで、バッハの人生に音楽の花が開く。レオポルト侯は、音楽に理解があり、バッハを高待遇で迎え、音楽の自由を与えてくれた。そのためバッハは才能を余すところなく伸ばし、今日私たちが親しむ数多くの名作を生み出すことができた。また、ケーテンの宮廷ソプラノ歌手アンナを後妻に迎え、アンナがバッハを助けて支えた。バッハは彼女に曲を贈り、また愛する子供たちに音楽を教えた。

このケーテン時代に、「イギリス組曲」「ヴィルヘルムフリーデン(息子)のための小曲集」「フランス組曲」「インヴェンとシンフォニア」「平均律第1巻」を完成させた。そして、ケーテンを離れてライプツィヒへ移って間もなく、パルティータの6曲を次々と生み出した。

両親を早くに亡くして苦労続きのバッハ、勉強家でありながらドイツを一度も出ることがなかったバッハの暗くて堅いイメージの人生であったが、ケーテン以降の音楽の自由と愛に満ちた日々の最絶頂にパルティータが生まれたのだということが、私には嬉しく感じられる。(宮脇)

30. F.ショパン：バラード 第1番 ト短調 Op.23

去年僕がクラ研に入部してから、ちょうど1年がたった。アンサンブルでは色々な作曲家の曲を演奏してきたが、ソロではリストの曲ばかり弾いてきた。

確かに僕はリストの曲が好きで、「ピアノの魔術師」とも言われる彼のさまざまな技巧曲を演奏するのはとても楽しいのだが、かといって永遠にリストしか弾かないのもなあと、ほかの作曲家の曲も弾こうと決めた。ちょうどその頃、「ショパン国際コンクール」で日本人2人が同時入賞し、日本中で大きな話題を呼んでいた。そんなこんなでこの文化祭では、「ピアノの詩人」の異名を持つフレデリック・フランソワ・ショパン(1810-1849)の曲を演奏することにした。

今回、数多くのショパンの作品からバラード第1番を選んだが、どこかでこの曲を聞いたことがあるという人も多いのではないかな。

実はこのバラード第1番、フィギュアスケートの羽生結弦選手が過去に使用していた曲なのだ。2015年のISUグランプリファイナルや、2018年の平昌五輪などはこの曲が使用されており、世界中を沸かせた羽生選手のあの活躍の裏にはショパンの音楽美が潜んでいたともいえるかもしれない。こういう訳もあって僕はこのバラードをセレクトした(とか書いてますが実際は僕が当てもなく探し出したこの曲に偶然にもタイムリーな要素や良さげな小ネタがあってこじつけているだけです)。

曲の解説も少しだけしておこう。《バラード》はショパンがピアノ作品に初めて用いた名称で、直接的には、ポーランドの詩人アダム・ミツケヴィチのバラッドにインスピレーションを得た、といわれている。(より広く視野をとるなら、1820年代にワルシャワ界隈でバラッドなる歌曲が流行しており、こうした文学上のジャンルがショパンの精神生活にはなじみ深いものだったと考えられている。加えてシューベルトのバラードや、パリのグランド・オペラに用いられたバラード風のアリアなどもショパンに大きな感銘を与えていた。従って、あらゆる体験が集約してショパン独自の新ジャンル《バラード》が誕生したとみるべきだ、という意見もあるらしい。なんかややこしい。)

例に漏れず今回も、多くの部員がショパンの曲を演奏する。曲目解説が苦手な僕がわざわざショパンの説明を書くといっそう読むに堪えない駄文になる気がするので、ここでは省かせていただく。語彙力に溢れたクラ研部員たちによる秀逸な解説を読みたい。(肥田)

31. E.グラナドス：演奏会用アレグロ

エンリケ・グラナドス・イ・カンピーニャ(1867-1916)は、スペインのカタロニア地方のレリダで生まれた。カタロニアは、ピカソやガウディなど多くの芸術家を輩出

している。グラナドスの父はキューバ生まれの軍人将校で、兄弟も軍人になるがグラナドスだけが音楽の才能を開花させる。

1874年に一家はバルセロナに移り、グラナドスは7歳で父の友人の軍隊の隊長から音楽の手ほどきを受け、1879年からバルセロナ音楽院でピアノを学び始める。1883年バルセロナ音楽院のピアノコンクールで1等賞を獲得し、この頃からスペイン民族音楽の収集で知られるフェリペ・ペドリルに作曲を師事する。ペドリルは、あらゆる分野の音楽に精通しており門下生にはスペイン近代音楽を代表するアルベニスやファリャがいる。

1886年からピアノ曲「詩的なワルツ集」などロマンティックで詩的なピアノ曲を数多く作曲する。1887年パリ音楽院に入学しようとパリへ渡るが腸チフスで入学試験を受けられず、個人的にシャルル・ヴィルフリット・ベリオにピアノを師事。ベリオからピアノで叙情的に歌う方法や、洗練された音色の出し方、ペタルのテクニックを学んだ。また、ベリオは即興演奏を重視したためグラナドスの華麗で叙情的なスタイルはベリオの影響が大きい。ベリオの門下生には、ラヴェルやリカルド・ヴィニェスなどがある。

グラナドスは、1889年にバルセロナに戻り「12のスペイン舞曲」を出版し、キューイ、サン・サーンス、マスネ、グリーグなどの当時の音楽界での巨匠から絶賛を受ける。1890年にピアニストとして公式デビューし、自作曲を初演。美しくも哀愁を帯びたロマンティズムとピアリズムで「スペインのショパン」「スペインのグリーグ」「ピアノの詩人グラナドス」などの愛称が付けられ、ピアニストとしても作曲家としても称賛され、その地位を確立した。

1900年には古典コンサート協会を設立し、交響楽と室内楽の演奏会を定期的に開催し、指揮者としても精力的に活動する。1901年バルセロナにアカデミア・グラナドス(グラナドス音楽院)を設立し、ピアノ教授として教鞭をとる。1911年にバルセロナで初演されたピアノ組曲「ゴイエスカス」は1913年にパリでグラナドス自身によって全曲演奏され、人々に熱狂的に受け入れられ大成功。フランス政府からレジオン・ド・ヌール勲章を授けられた。「ゴイエスカス」は、パリ・オペラ座の支配人からオペラにするよう依頼を受け、パリ・オペラ座で初演される予定だったが第一次世界大戦の勃発で中止になり、1916年にニューヨークのメトロポリタン・オペラで初演された。グラナドス夫婦も同席し大成功をおさめるが、スペインへの帰路で乗船していたサセックス号が英仏海峡でドイツ潜水艦の魚雷攻撃で撃沈され、悲劇的な最期を遂げた。

「演奏会用アレグロ」

1903年スペインのマドリード音楽院のピアノ科卒業試験に使用する曲を決めるコンテストで、審査員の満場一致で優勝したと言われる(応募者の中にはファリャも含ま

れていた)。グラナドスは演奏会でこの曲をたびたび披露し、絶賛されていた。豪華絢爛なパッセージと哀愁を帯びたロマンチックな美しいメロディーの対比が素晴らしいため、人気が高い曲である。嬰ハ長調の華やかな短い序奏で始まり、分散和音でできたエネルギッシュな第1主題へと続く。スペイン的な色彩が美しい第2主題、静かで瞑想的な第3主題、ドラマチックな展開部を持つ。

再現部では第1主題に続いて第2主題が情熱的に奏され、マルテラート・オクターブの短いコーダで力強く終わる。(藤田)

32. C.ドビュッシー：12の練習曲 第3番 4度のために

印象主義音楽の創始者として知られるフランスの作曲家クロード・ドビュッシー(1862-1918)。彼の音楽の特徴として長音階・短音階以外の旋法や、機能和声に囚われない自由な和声法が挙げられるが、決して初めからこれらの技法が完成していたわけではなく、後期になるにつれてより強く、より尖ったものとなっている。初期の作品である「2つのアラベスク」(1888)、「ベルガマスク組曲」(1890)から分かるように、もともと彼はすぐれた和声感覚の持ち主であり、美しい音楽を作ることに長けていた。この頃から印象派的色彩を見せ始めているが、ピアノの書法にはエドヴァルド・グリーグ(1843-1907)やガブリエル・フォーレ(1845-1924)といった先人の影響がはっきりと認められ、まだ完全に独創的とは言えなかった。その後ドビュッシーは国民学派の作曲家集団であるロシア5人組、特にモデスト・ムソルグスキー(1839-1881)の影響を受け、民族と文化の本質的な違いを示しながらも、彼独特の新しい感覚の世界を開拓してゆく。「版画」(1903)、「映像」(第1集1905、第2集1907)の頃には、ピアノの響きが描き出す光と影を極限まで追求しようとする彼の鋭い感覚によって曲中のいたるところに様々な新しい和音および全音音階を初めとする革新的な技法が展開されていった。これこそドビュッシーが近代音楽の始まりと言われる所以である。このとき探求されたあらゆる技法が彼の晩期の作品にあたる「前奏曲集」(1910-1913)およびこの「12の練習曲」(1915)に盛り込まれているが、これらは調性がかなり曖昧で表現されている内容も難解を極めるという曲者である。

今回演奏する練習曲第3番「4度のために」は、4度音程の指の運動に焦点を当てるというよりはむしろ幾つかの重なった4度の和音をどう綺麗に響かせるかに重きを置いているのだが、実は技巧の練習よりも表現の練習の傾向が強いというのは他の11曲に関しても同じく言えることである。この辺りはフレデリック・ショパン(1810-1849)の練習曲がただの指の訓練にとどまらず豊かな音楽性を伴った作品として捉えられていることと通じているように思える。完全4度の平行移動で始まる冒頭部分はどこか東洋風な雰囲気を感じさせているが、すぐに増4度を含む不協和音となり、どこか空虚さを感じさせるような旋律で進行してゆく。(瀧口)

33. S.ラフマニノフ：幻想的小品集 前奏曲 嬰ハ短調 Op.3-2

セルゲイ・ラフマニノフ(1873-1943)はノヴゴロドで生まれ、18歳の時にモスクワ音楽院ピアノ科を首席で卒業した。その翌年、彼が19歳の時に出版社グートハイルと契約を結び、5曲からなる「幻想的小品集 Op.3」を作曲しモスクワ電気博覧会にてラフマニノフ自身によって初演された。

この曲は爆発的な人気を生じ、中でも Op.3-2 は彼の代表的な作品として後世まで知られている。しかしながら当時のロシア帝国では著作権が確保されておらず、ラフマニノフ自身の収入はわずかなものだったという。

また、2010年、バンクーバーオリンピックにて浅田真央さんが自身のフリープログラムにてこの曲を使用したことで日本での知名度も増した。

曲の出だしから3つの低音域の和音が繰り返される構成となっており、その部分がロシア正教の教会の鐘の音のように聞こえたことからいつの日か Op.3-2 が「鐘」と呼ばれるようになった。(山埜)

34. F.ショパン：スケルツォ 第2番 変ロ短調 Op.31

スケルツォ第2番はフレデリック・ショパン(1810-1849)が27歳の1837年にパリで作曲され、アデーレ・フュールステンシュタイン伯爵令嬢に献呈された。ショパンがこれを作曲したこの年、ショパンは肺結核を発症し、また恋人マリア・ヴォジンスカ嬢との恋愛とその破局という苦悩の中にあった。また、女流作家ジョルジュ・サンドとの交際が始まりつつあった時期で、これらがこの曲に大きな影響を与えていることは容易に想像できる。同年には後にピアノソナタ第2番の第3楽章となる「葬送行進曲」も作曲されている。

スケルツォとはイタリア語で「冗談」「滑稽」「ユーモア」というような意味で、従来は簡明な形式の陽気で軽く、おどけた小規模な曲を指す。しかしショパンのスケルツォは少し異なる。華やかさがあながらも暗く深刻な雰囲気、大規模な曲である。

囁くような序奏、穏やかな音調の中に突如現れる激情、左手の軽快な伴奏に乗せて奏でられる主題は優雅なだけではなく、胸の踊るような喜びをも鮮やかに表現されている。華々しく締めたいと思う。

ところで、我々高3はこの文化祭が最後のコンサートとなる。クラ研デビューは中1で幻想即興曲だった。ショパンに始まりショパンに終わるクラ研人生、なんかイイ。(田中 庸介)

Attention

- * マスクをご着用ください。
- * 大声での会話はお控えください。
- * 会場内は飲食禁止です。
- * 関係者以外の録音・撮影はご遠慮ください。
- * フラッシュ撮影はご遠慮ください。
- * 携帯電話・スマートフォンなど、音の出る電子機器の電源はお切りください。
- * 演奏中の出入りはご遠慮ください（曲と曲の間は出入り自由です）。
- * 本冊子に落丁がございましたら受付にてお取り替えいたします。
- * 何かご不明な点がございましたら、お近くの部員までお声をおかけください。

～公式サイト・公式 SNS ページのご案内～

灘校クラシック研究部では、公式サイト、公式 Twitter・Facebook ページを運営しております。日頃の活動報告やコンサート情報を発信しておりますので是非ご覧ください！



発行	灘校クラシック研究部
表紙・編集	毛利天翔
校正	肥田孟・毛利天翔